

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381216

研究課題名(和文)造形批評力の獲得を目指した校種間交流鑑賞プログラムの開発と普及システム作り

研究課題名(英文)The construction and development of a familiarizing system for art appreciation programs creating interactions between different types of schools

研究代表者

三澤 一実 (Misawa, Kazumi)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：10348196

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：校種間交流鑑賞プログラムは期間内に60余件実施した。複数の大学間でプログラムを協働構築することでより効果的な成果が現れることが判明した。この仕組みは普及システムとしても有効である。造形批評力の獲得は、大学の授業『造形と批評』において、造形批評力を獲得する仕組みを研究し検証してみた。鑑賞対象を「事実」と「印象」に分け分析することで鑑賞者を造形的な特徴に着目させ、造形の持つ特徴を言語化して語らせることが有効であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：We found that establishing programs through the collaborations between different schools creates more effective achievements by organizing 79 art appreciation programs during the research period. From the result, we concluded that this new system was productive as a familiarizing system.

One of the class in the university titled "Making and Critique" researched and proved the system of how students acquired the ability for art critique. We found that it was effective to let viewers see formative characteristics and verbalize and talk about them by separating the objects of art appreciation into "fact" and "impression" and analyzing them.

研究分野：美術教育

キーワード：鑑賞 題材開発 造形批評 ワークショップ コラボレーション アクティブラーニング

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会的背景については平成24年8月28日に、中央教育審議会より二つの答申が出された。即ち、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」と、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」である。前者がこれからの教育の質的向上を目指すものに対し、後者はそのために如何に大学教育があるべきかという内容である。この二つの課題に対して、造形美術教育では両者の課題を具体的実践によって解決していく研究が喫緊の課題として社会に提案する必要があった。その中で、美術教育の基礎的な資質として注目できる造形要素の理解について、教員養成の立場から研究を取り組む必要があった。

(2) 本研究はその造形要素を扱う鑑賞のあり方について先行研究に取り組んできた(旅するムサビプロジェクト)。2008年より5年間にわたり、全国10都道府県で45回、10大学とコラボレーションし、11の教育委員会や研究団体で実践を公開し、学生が自作品を持参しファシリテーターとして児童生徒と鑑賞活動を行うというユニークな手法と、鑑賞活動を通して、学生および教員、生徒がそれぞれの立場で成長できる学び方が多方面から評価されてきた。この実践を踏まえ、美術科の教員養成という視点でこれらの活動を整理し再提案する必要があった。

(3) 造形批評力という視点では、対話による鑑賞が教育現場に広がりを見せてきたと共に、その課題が露呈しはじめていた。即ち、造形的な理解を伴わない物語づくりの対話による鑑賞である。多くの教育現場で対話による鑑賞が行われるものの、美術教育の能力獲得からは疑問視される事例が多く存在した。この課題は美術教育において、造形的な言語能力の獲得と批評に伴う基本的な理論構築が不足していることを示していた。これらの課題に対して造形批評力獲得という視点で研究を進める必要があった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は二つの大きな目的がある。まず一つは造形美術教育の分野ににおいて、全国の学校教育および教員養成大学に提供できる造形批評力の獲得を目指した校種間交流鑑賞プログラムの開発である。造形批評という言葉は造語であるが、対象を観察しそれらの形や色彩など造形的な特徴をもとにイメージをもち、造形的な要素から生まれる言葉を用いて対象の良し悪しを語る活動である。この活動は造形物の批評において基礎的な能力であると考え、その能力を獲得するための鑑賞プログラムの開発を目的とした。具体的には大学生の制作した作品を使った小中学校等で対話を通じた鑑賞活動のプログラム作りであり、それまでに先行研究としてき

た事例をもとに、更にそのプログラムを洗練させていくことを目的とした。

(2) 二つ目は校種間交流鑑賞プログラムの普及システム作りである。このシステムは教育現場で日常的に活用されて初めて意味のあるシステムとなっていく。そのためには小中学校などのニーズと、それに合わせた学生の能力育成、及び大学間共同によるプログラム開発などを研究開発し、実施できる汎用性のあるシステムを考えていく必要がある。この研究では校種間交流鑑賞プログラムを多くの学校で実施し、それらの報告書を作成して全国の関係各所に配布し普及させることが必要である。

(3) 異校種間鑑賞プログラムの海外での実施により、対話による鑑賞の国際比較を通して、国を問わず実施できる鑑賞プログラムを検証していく。そのことにより、鑑賞教育に関することばの問題や文化の問題を明らかにして、鑑賞プログラムを普遍化できる内容に作り上げていく。また鑑賞活動による国際交流の可能性も探っていく。

3. 研究の方法

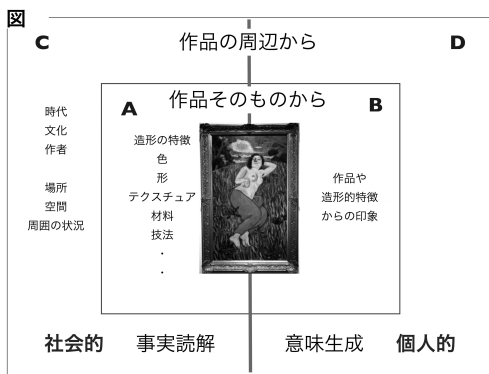
(1) 本研究は毎年、校種間交流の要請がある学校の中から10校程度を選出し、校種間交流プログラムを実施する。一つ一つのプログラムは、企画立案・実施・検証・表現の四つのPDSA(Plan, Do, See, Action)サイクルとして実施する。海外比較においても日本と同様に実施し比較検証を行う。学生や、児童生徒、教員の学びや変容は、記録をもとにした映像ドキュメンタリー作成や記録集として単年度ごとにまとめていく。最終年度には蓄積された表現記録等を分析し、本研究の成果を総合的にまとめると共に、造形批評力を獲得する校種間連携プログラムとして汎用性のあるプログラムを構築し、研究成果報告書の形で関係機関に配布・公表を行っていく。

4. 研究成果

(1) 造形批評の理論構築

造形批評という言葉を定義し、その能力を獲得するための理論構築を大学の授業「造形と批評」として3年間展開した。このことにより批評活動の定義と、その具体的な方法を明らかにし、一般に普及できる方法として構築することが出来た。批評の内容の具体的な内容は、A. 作品そのものに表された事実(客観)と、B. 印象(主観)に分類し、その分類を第一次の作品そのものから受け取る領域と、第二次の作品の周辺から受け取る領域C, D(次ページの図参照)とに分け批評のプロセスを構造化することによって、ワークシートなどを使って造形批評力を獲得していく仕組みを考えた。

このことで、造形的な要素を造形言語として



活用し作品を読み解く、また味わう活動がより一層鑑賞者に意識されるようになった。

(2) プログラムの実践

3年間で学生の作品を小中学校で対話を通して鑑賞するプログラムを中心に、黒版ジャック、ワークショップなど計60件のプログラムを実施した。対話を通じた鑑賞では、造形と批評の授業で考案した批評プロセスを活用し、学生や子どもたちの対話の中に造形的な言語を意識させ活用する鑑賞活動を展開させた。以前から継続している鑑賞やワークショップも含め計164件の実施となった。異校種間交流鑑賞プログラムについては、それまでの実施件数も含め検証を行った。

(3) 海外との比較検証では、当初予定していたフランスでの実施が相次ぐテロで2年間に渡り中止せざるをえなかった。その間、台湾の国家教育研究院の美感教育研究チームが旅するムサビの対話型鑑賞を視察し、その縁で台湾の小・中・高等学校で実施することになった。結果は、日本の小・中学校と特筆すべき相違点はあらず、造形的な特徴を読み解きながら対話を通して鑑賞活動が深まっていた。また、コミュニケーションツールとしての言葉の存在についても意識させられる出来事となり、今後の研究につなげていける視点を多く発見できた。

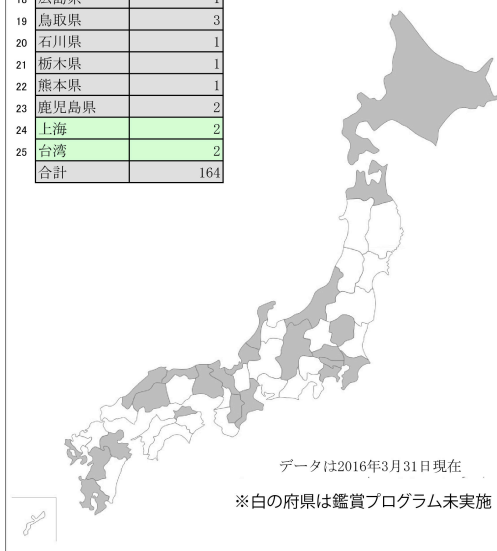
(4) 3年間の実践のまとめとして作成した報告書は、学生が制作した「美術って必要なの」と分担者と共に制作した「報告書」、及び台湾での実施報告書の3冊を編集し出版した。この中で、活動を振り返り、造形批評という視点で行う編集作業が造形的な批評能力を獲得する一手法として非常に有効に機能するという実感を得た。即ち、経験を文章に表現し、その伝達したい内容を具体的なデザインで表現していく過程において、造形的な視点でディスカッションをしながら検討していくプロセスは、それまでに獲得した造形的な批評能力を十分に活かしながらデザインしていく活動であり、学生にとって編集作業が造形的な批評能力を意識して使う場面となった。

旅先（校種別実施件数）*	
幼・保	2
小学校	51
中学校	72
高等学校	9
大学	2
教員(教育委員)	6
一般	21
養護	1
合計	164

大学とのコラボレーション	
1 宇都宮大学	1
2 活水大学	1
3 香川大学	1
4 金沢美術工芸	1
5 京都教育大学	1
6 京都造形芸術	1
7 京都精華大学	1
8 京都造形大学	1
9 熊本大学	1
10 國學院栃木短	1
11 埼玉大学	10
12 信州大学	7
13 聖徳大学	15
14 東京家政大学	12
15 長崎純心大学	1
16 奈良芸術短期	2
17 兵庫教育大学	1
18 弘前大学	1
19 福井大学	1
20 文教大学	5
21 北海道教育大	1
22 横浜国立大学	2
23 和光大学	3
合計	71

旅先（県別実施件数）*	
1 東京都	59
2 埼玉県	26
3 千葉県	19
4 神奈川県	6
5 長野県	21
6 新潟県	1
7 北海道	3
8 青森県	1
9 奈良県	2
10 島根県	1
11 福井県	1
12 京都府	2
13 兵庫県	2
14 大分県	1
15 長崎県	4
16 三重県	1
17 香川県	1
18 広島県	1
19 鳥取県	3
20 石川県	1
21 栃木県	1
22 熊本県	1
23 鹿児島県	2
24 上海	2
25 台湾	2
合計	164

*実施件数は実施校数
*他大学とのコラボレーションは他大学の学生または教員と共同で取り組みを行った件数。



(5) 異校種間という取り組みでは、小・中学校での実践を中心に、幼保、大学、教員、美術館などでの実践を行った。基本的にはどの年代でも鑑賞活動やワークショップは問題なく実施できるが、年齢が上がるに従い概念的な言葉で対象を見る傾向が強くなるが、その発言に造形的な批評能力との関連が見られない印象を受けた。即ちこの能力は個の経験をベースに鑑賞が成立している状況と言えよう。この相関関係の調査は今後の研究課題としたい。大人対象の場合は、美術館などに来る美術関係者がその対象となっているため、それ以外の人との比較観察は今後の課題である。また、小・中学校においては、日頃の授業との関連が大きく、いわゆる「共通事項」を意識している指導が十分出来ている学校においては、色彩や形に関連付けて発言する児童生徒が多く、造形的な批評能力はある程度獲得していると考えられる。この調査研究も今後の課題である。今後は、実施校の抽出において比較観察できるような選定が必要である。

(6) 3年間の研究活動の中であらたな取り組みとして2つの実践研究が生まれてきた。一つは「図工の学力視(み)える化プロジェクト」であり、これは授業中の児童生徒の活動の記録をポスターにして伝える取り組みである。ポスターを制作する際に造形批評力が必要となってくる。もう一つの取り組みは、所沢市の中学校との連携で始めた「朝鑑賞」の取り組みである。この取り組みは、週一日、朝の会で対話型鑑賞をクラス担任が行うものであり、実施による学力との相関関係を探っていく研究である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 三澤一実、大学造形美術教育研究、美術の学びを伝える「美術の学力視える化プロジェクト」の研究、査読無し、14巻、2016、pp. 18-19
- ② 三澤一実、日本美術教育研究論集no. 49、造形批評力獲得のためのプログラム開発、査読有り、49巻、2016、pp. 155-162
- ③ 東良雅人、実践国語研究、美術科において育成する資質・能力と学習内容の関係を明確にすること、査読無し、巻39、2015、pp. 66-67
- ④ 三澤一実、大学造形美術教育研究、黒版ジャックの取り組み、査読無し、巻13、2014、p. 28-29
- ⑤ 三澤一実、大学造形美術教育研究、インターカレッジ版旅するムサビ、査読無し、巻13、2014、p. 26-27
- ⑥ 東良雅人、教育美術、中学校におけるイメージと考える力、査読無し、75巻、2014、pp. 44-47
- ⑦ 三澤一実、造形ジャーナル、感性と批評、査読無し、Vol. 58-4 no. 420、2013、pp. 2-3

[学会発表] (計9件)

- ① 三澤一実、公益社団法人日本美術教育連合、造形批評能力獲得のためのプログラム開発、2015、東京家政大学
- ② 三澤一実、芸術関連学会連合(美術科教育学会)、旅するムサビがしてきたこと、2015、京都国立近代美術館
- ③ 東良雅人、造形教育センター、子どもたちが自分の中に新しい価値をつくり出す創造活動、2014、東京学芸大学附属竹早小学校
- ④ 東良雅人、武蔵野美術大学全学研修会、美術教育の現状と目指す方向性、2014、武蔵野美術大学
- ⑤ 米徳信一、武蔵野美術大学全学研修会、

造形と批評のとりくみ、2014、武蔵野美術大学

- ⑥ 三澤一実、武蔵野美術大学全学研修会、学外連携による7年間の取り組みと学生の育ちについて～旅するムサビと造形批評、2014、武蔵野美術大学
- ⑦ 三澤一実、長野県美術教育研究大会、「メディアとしての美術」-子どもと社会をつなぐもの-、2013、東御市サンテラスホール
- ⑧ 三澤一実、第50回全国高等学校美術工芸教育研究大会、今求められる高校教育～連携と社会発信の中で～、2013、サンポートホール高松
- ⑨ 三澤一実、大学美術教育学会、造形批評力を目指した校種間交流鑑賞プログラムの開発と普及システムづくり、2013、京都教育大学

[図書] (計5件)

- ① 三澤一実ほか、美術って必要なの?、旅するムサビ冊子編集委員会、2016、40
- ② 三澤一実、米徳信一、東良雅人ほか、旅するムサビ in 台湾、武蔵野美術大学国際交流助成金、2016、32
- ③ 三澤一実、米徳信一、東良雅人、「造形批評力の獲得を目指した校種間鑑賞プログラムの開発と普及システムづくり」報告書、自費出版、2016、32
- ④ 米徳信一ほか、武蔵野美術大学出版局、美術教育の題材開発、2014、pp. 298-319
- ⑤ 三澤一実ほか、武蔵野美術大学出版局、美術教育の題材開発、2014、431頁中72ページ担当

[その他]

ホームページ等
武蔵野美術大学旅するムサビプロジェクト
<http://tabimusa.exblog.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三澤一実 (MISAWA Kazumi)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：10348196

(2) 研究分担者

米徳信一 (YONETOKU Shinichi)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：80240381

(3) 連携研究者

東良雅人 (HIGASHIRA Masahito)
国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官
研究者番号：70619840